

第2回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）選評

○全体講評

今回のコンクールには国内外より59名の応募があった。グローバルイゼーションという掛け声に関わらず、むしろそれ故にか、異文化間のコミュニケーションの重要性が強く意識される時代にあって、この数字を多いと見るか少ないと見るかは立場によって異なるだろうが、いずれにせよ、各応募者の意欲と関心は高く評価されるべきであり、今後ともそれを維持してくれることを強く願う。なかでも、最終選考に残った11名の方々の翻訳はどれもレベルの高いものであり、課題作品間で翻訳の難易度には若干の差があると思われるに関わらず、例外なく今後に大きな期待を抱かせるものだった。審査委員一同、優劣をつけるのに嬉しい苦悩を味わったことを告白して、総評としたい。

○最優秀賞 サム・ベット氏作品講評

澆^{はつらつ}瀟とした翻訳で、大方の審査員の支持を得た。特に小説部門「涙売り」の訳は、作品の詩情を見事に捉え、その底流にあるエロティシズムをも表現できている点、しかもほぼ自然な「英語化」に成功している点、が高く評価された。また評論・エッセイ部門「床屋嫌いのパンセ」は翻訳がなかなか難しいと思われるが、タイトルの魅力的な訳に見られる大胆さとアイロニーの内在するロジックを押さえた訳文に、優れた才能がはっきり窺える。瑕疵^{かし}があるとすれば、訳者のあり余る才気が空回りしていると思われる部分があることで、そこでは巧みな意識が原文のバランスを崩しているという懸念が残らないでもない。むしろ抑制された文体が力を持つということがもっと意識されてもいいだろう。しかし、若々しさを感じさせる熱のこもった訳文に見られる勇み足めいたところも、見方を変えれば訳者がいかに高いポテンシャルの持ち主であることを示しており、最優秀賞にふさわしいと判断した。

○優秀賞 ニック・ジョン氏作品講評

原文の日本語の意味を全て伝えようと努めていて、好感の持てる訳文になっている。翻訳をどう考えるかにもよるが、こうした丁寧な姿勢はひとつの理想形として評価されるべきだろう。翻訳対象としては難物である小説「千日手」に挑んだ意欲は高く評価されるし、「床屋嫌いのパンセ」も言葉の選択に訳者の優れたセンスを感じさせる箇所が少なくない。問題は、両部門とも訳文にムラが散見され、文章の流れが損なわれているという印象を禁じえないことと、丁寧さが訳文の風味を消すように作用している面も否定できないことである。しかし、原文の意を出来るだけ汲もうとするこの訳者の謙虚さを高く評価する声のあったことを付記して、今後のさらなる精進に期待したい。

○優秀賞 皆本 飛鳥氏作品講評

「涙売り」「床屋嫌いのパンセ」とも良質で自然な訳文に仕上がっており、その力強さ、安定感が一頭^{いっとうち}地を抜いていた。臨場感を伴った訳文でもあり、詩的な部分の翻訳の巧みさも特筆に価する。興味深いのは、同じ優秀賞を受賞したニック・ジョン氏の作品と比べると、英語の明快さ、トーンの一貫性で勝るが、それと裏腹に、「床屋嫌いのパンセ」に見られるアイロニーや原文の細部への目配りが不足しているのではないかという懸念が残ることである。実のところ、こうした相反する方向性は翻訳の宿命であり、それを兼ね備^{あげつら}えたる翻訳はきわめて難しく、また稀であろう。その意味で、あれこれ問題点を論^{ろん}う審査員一同は臆^{おそ}れを得て蜀^{しよく}を望んでいるわけであるから、優秀賞は十分に高い評価であると自信を持って欲しい。

○現代日本文学翻訳・普及事業 第2回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）概要

1 応募資格

国籍、年齢は問わない。ただし、翻訳作品の単行本の出版経験のある人は応募不可。

2 実施期間

課題図書発表及び公募開始：平成26年12月25日

翻訳作品受付期間：平成27年6月1日～平成27年7月31日

3 課題図書

(1) 小説の部

小川 洋子 「涙売り」

松浦 寿輝 「千日手」

(2) 評論・エッセイの部

堀江 敏幸 「床屋嫌いのパンセ」

丸谷 オー 「昭和が発見したもの」

4 翻訳点数 小説の部、評論・エッセイの部より各1点、計2点

5 翻訳言語 英語

6 賞 最優秀賞 1名、優秀賞 2名

7 審査員

(英語)

高橋和久 (東京大学名誉教授、英文学)

スティーブン・B・スナイダー (翻訳家、日本文学研究者、ミドルベリー大学教授)

ジャニー・バイチマン (翻訳家、日本文学研究者、大東文化大学名誉教授)

マイケル・エメリック

(翻訳家、日本文学研究者、カリフォルニア大学ロサンゼルス校上級准教授)

○現代日本文学翻訳・普及事業 第1回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）概要

1 実施期間

課題図書発表及び公募開始：平成22年12月20日

翻訳作品受付期間：平成23年9月1日～平成23年11月30日

入賞者発表：平成24年5月30日

2 課題図書

(1) 小説の部

池澤 夏樹 「都市生活」、角田 光代 「白っていうより銀」、
水上 勉 「リヤカーを曳いて」

(2) 評論・エッセイの部

安部 公房 「ヘビについてⅠ、Ⅱ、Ⅲ」、白洲 正子 「お香とお能」、
谷崎潤一郎 「^{らんだ}懶惰の説」

3 受賞者 ※（ ）内は国籍，〔 〕内は選択した課題図書

英語 ／ 最優秀賞（1名） ポリー・バートン（英国）
〔「都市生活」「ヘビについてⅠ、Ⅱ、Ⅲ」〕
優秀賞（2名） 松島あおい（日本）
〔「白っていうより銀」「ヘビについてⅠ、Ⅱ、Ⅲ」〕
フィリップ・ブラウン（英国）
〔「リヤカーを曳いて」「ヘビについてⅠ、Ⅱ、Ⅲ」〕

独語 ／ 最優秀賞（1名） セバスティアン・ブロイ（ドイツ）
〔「都市生活」「ヘビについてⅠ、Ⅱ、Ⅲ」〕
優秀賞（2名） ナディーネ・グルーシュヴィッツ（ドイツ）
〔「都市生活」「ヘビについてⅠ、Ⅱ、Ⅲ」〕
イザベル・渚・マッテス（ドイツ）
〔「リヤカーを曳いて」「^{らんだ}懶惰の説」〕

4 審査員

（英 語）

スティーブン・B・スナイダー （ミドルベリー大学教授，日本文学）

川本皓嗣 （東京大学名誉教授，比較文学），高橋和久 （東京大学教授，英文学）

（独 語）

エドゥアルド・クロッペンシュタイン （チューリヒ大学教授，日本文学）

池田信雄 （東京大学教授，ドイツ文学），初見 基 （日本大学教授，ドイツ文学）